

浄土

三月号

真野正順氏追悼特集

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一日発行)
 昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別優待承認第三五二号)
 昭和三十一年二月二十五日 印刷 昭和三十一年三月一日発



東京都港区赤坂青山町四九
 浄土宗 梅窓院

電話(四〇〇)一三八五

会仰鑽上人然法

待望の書出ず!!

法然上人が現代においてになったら

「選択本願念仏集」を

このようにお説きになるであろう

竹中信常 著

選択集私解

新書版 一二〇頁
定価 一二〇円
送料 三〇円

難解な内容を平易に
若い世代にピッタリ
全浄土宗徒は必らず一冊

施本用に御利用下さい (五部以上送料不用)

発行者 法然上人鑽仰会
発売所 大道社

—— 浄 土 ト ラ ク ト ——

村瀬秀雄 著

月影抄

—— 御法語の掣り ——

葵ぐさ

—— 御法語の掣り(その二) —— B 六版・十六頁
定価十五円 二十円

目次

- 一、自身は凡夫なり(わが身わろして)……………一
- 二、漫心は悪魔に同じ(わがちからにて往生する事ならば)……………四
- 三、念仏に差別なし(あの阿波介も)……………六
- 四、罪人ながら往生す(罪人は罪人ながら)……………八
- 五、生涯弛まむ努力(ある時の給はく、あはれ此度)……………十
- 六、念仏のご利益(およそ五種の嘉譽を)……………十二
- 七、学生と念仏(学生骨となりて)……………十四
- 八、あとがき……………十六

東京都千代田区飯田町一ノ二二

申込先 法然上人鑽仰会

振替 東京八二一八七番

二十部以上	五分引
十部以上	一割引
五部以上	一割五分引
二部以上	二割引

浄土

三 月 号



浄土の教、時機を叩きて、行運に
当るなり。念仏の行、水月を感じ
て、昇降を得たり。

法然上人御法語

—◇ 目 次 ◇—

表紙 香爐浮彫菩薩像（神奈川・高德院前）

真野正順氏追悼特集

- 学人真野先生……………石津照塵（2）
真野先生の思い出……………武田泰淳（4）
真野先生と放送……………摩尼清之（6）
真野先生の思い出……………佐藤密雄（10）
道はせまく……………竹中信常（14）
- 三分間 真の宗教心……………宮沢善正（20）
法 語
紀行文 アメリカ旅行⑨……………佐藤治子（22）
御法語をいただく……………（19）
表紙の写真……………（32）

念仏と利益……………山本空外（29）

学人真野先生

石 津 照 聖

(日本宗教学会会長
東北大学教授・文博)

法然上人鑽仰会（刊行雑誌「浄土」）の創始者である真野正順氏が、昭和三十七年十二月二十九日、心臓ぜん息のため他界された。生前の功績をふりかえる意味において、追悼特集を企画いたしました。

や矢吹先生がたが、次々に、教界をはじめ、政界や処界で御活動になり、その頃から、真野先生が大正大学の宗教学の謂わば二代目の重鎮でありました。時折色々御会合で御目にかかった印象を、私共は生々と今ももって居ります。

真野先生御他界のことを電話電報で承って、一瞬愕然と息を呑んだことでした。恰度、暮れの二十六日に東京で色々御噂を致した後でしたので、悲報をうけて、何か、ひっくりかへった様な気がいたしました。私が最後に御目にかかったのは、たしか、三年ほど前に、竹中教授とごいっしょに御宅に伺った時だったと思います。その時は、従来の治療の方法が違っていたことがわかったので、今後からは新しい方法をとるから、恢復が非常に早くなるだろうと、大変お元気でありました。

大正大学は、日本の宗教学の歴史に輝やかしい貢献をされた名門であります。私共が学生の頃、すでに椎尾先生

昭和五年五月に東京大学の宗教学講座創設二十五年記念会が催され、このとき、日本宗教学会が組織を新にして足いたし、第一回の学術大会が開かれましたが、その第二回の日本宗教学会大会の開催を大正大学で引き受けて下さって、実に今日の日本宗教学会の礎石をきつぐために、大きな役割をして下さったのであります。その時の中心が真野先生であったと思います。その前後から、大正大学の宗教学研究会はいろいろな面で、日本宗教学会や日本の宗教学界と密接な連絡をもち、始終活動をつづけて居られました。宗教学の「学報」等も、大正大学のそれが最も早いものの一つであろうと思いますが、これも真野先生を中心とした皆様方の研究活動であったと思います。

ことに私共として忘れられぬ、また感謝にたへぬこと

は、昭和三十三年に開催いたしました国際宗教学宗教史会議の準備當時のことです。当時、すでに真野先生は御病気で、御宅で闘病の生活を続けて居られ、御話も息が時々きれて、かすれた調子でありましたが、それにも係らず、非常に熱心に私共の話をきかれ、且つ全幅の賛成を下さいました。その当時、増谷教授とごいっしょに伺った



故 真野正順氏

と思います。そうです。うわけで、当初の促進委員会や準備

備委員会の委員をお願い致し、後に組織委員会が出来たときにも、組織委員にお願い致す筈でありましたが、健康の理由で御辞退されました。しかし、その当時、陰に陽にいろいろ御力添へをいただきました。

真野先生の御研究は幅が広く、今日の言葉でいへば、こ

り、当時、東西哲学の比較研究という趣旨で設立された「哲学研究会」を主宰されたこともあって、私なども何回か参加したことを覚えて居ります。

先生は能弁ではなかったかも知れませんが、不思議に強く人の心に突き入って来る説得力をもたれ、また、人の話をよく聴き、おだやかにこれを味った上で、いろいろと御自分の意見を話される事であったと思います。

教界や宗門において、先生が非常に大事なお方であったことは、私が申す事でも居いせんが、宗教学や仏教学の学界方面においても、先生は大きな推進力でありました。ことに長年にわたり、引きこもって御静養の間におきまして、この御役目は失はれなかったように思いました。先生の御他界によって、私共は有形、無形の意味で、大きな頼りを失ったこと痛感いたします。

宗教学、宗教史の領域においても、日本の学界は近來、欧米の学界から高く評価されるようになって参りました。しかし、現在及び将来にわたって為されるべき事業が累積して居ります。こういう際に先生のような御方が御他界されましたことは、まことに痛恨にたへぬことであります。が、残された者と附しまして、私共は協力して、出来るだけの努力を致す次第でございます。

真野先生の思い出

武田泰淳

(作家)

私の父の大島泰信は、宗教学の先生をやっていたし、真野先生も宗教学の専門家であられたから、父の代理で芝のお寺へもおうかがいしたことがあり、おちかづきになれたのである。先生が富士山麓の山中湖畔に別荘を借りていられたとき、私は、佐藤密雄、佐藤良智、中村康隆さんなどに連れられ、一晚、泊めていただいたことがあった。そのとき先生は、宮沢賢治の著書をそろえて持参してきていて、さかんにこの新しい詩人の話をなさった。先生のお話をうかがっていて、私の直感したのは「文学、芸術についての理解が実にするどい方だ」ということだった。最初にくれた印象は、何よりも坊主くさくない、新鮮でハイカラな人だと言うことだった。坊さんは坊さんくさい方がよろしいと思うけれど、もとにかく先生は、ウジウジした古くさい気がねを感じさせなかった。「誰々は気の小さい男さ



若き日、山中湖畔にて

ね」などと、先生が発言されると、ぜんぜん抵抗なしにそれがこちらの胸にスーッと入ってきた。真理運動に参加されてから脱退されるまでの先生の行為は、すべて私利私慾をはなれ、アッサリして気持のよいものだったように記憶している。

そのころ、浄土宗の若い者は、リンデン・スキークラブをつくり、北京で客死した赤尾光雄さん、今や宗門の垂鎮となられた佐藤密雄先生などがスキーかついで、雪山へ出かけていった。五色温泉へ行ったとき、真野先生をおさそいしたところが五色の宿屋が急坂のてっぺんにあり、ゲレンデへ出てすべり出したら何メートルも止まらないのである。瘞せがたの先生は、ころびにころんだあげく、宿へもどってから「いてえ、いてえ」と全身にメンソレタムを塗っていられた。先生が胸をわずらって、長い病床生活をつづけるようになったのは、スキー行の直後だったように思われ、ぼくらの罪は重大だったかなと反省しています。ウサギ鍋をついたあとで、先生は羊かんを切る役を私に命ぜられた。「ケチケチ切るなよ。羊かんは厚ざりでなくちゃ、うまくねえぞ」と、からかうので、私が長い羊かんを四つぐらいに切ったのをみて「アレ、こいつ、こんなに厚く切りやがって」と、先生は笑ったものだ。実さい、若

い者の心をたちどころに見ぬいてくれる、気ツブの素直な人物であった。

戦争末期に、京都学派の若い学者たちが、「世界史派」を称され、仲間うちの座談会を「中央公論」に連載したことがある。それを読んだ先生はどうも右翼ばっかりじゃ、おかしいと思っていたよ。何か他にねえはずはないと思ってたんだ。そしたらやっぱり、こういう連中がいやがったよと、私に話された。

特別講習会で受講したさい、先生は、仏教に以前のインド哲学の話をきかせて下さった。そのお話も、独特の弾力性に富むおもしろみがあり、あの若々しい、なめっこい声が、今だに私の耳にこびりついてはなれないのである。父の代理で、どなたかの結婚披露宴へ行ったことがある。その日、父の古くさいクロック・コートを、ぎこちなく著こんでかけた。会場で私を見つけた先生は、「うん、こいつ、おやじのクロック・コート著てきやがったな。恥じかかないで、そんな恰好で来るのは、なかなか感心だな」と、ほめて下さった。ああ、ああ、実に実に、感じのいい、何でもわかって下さる先輩を、ぼくらは永久に失ってしまったものだ！

真野先生と放送

摩 尼 清 之

(NHK中央研修所・教授)

真野先生は私にとっては公私に亘って最も大きな影響をいただいた方でした。そして、健康が恢復されたら、さらにまた新たな問題で教えを乞いたいと願っていたのですが残念なことになってしまいました。

先生の知遇を得たのは戦後のことです。私がなぜ先生からこのようなご指導を受けることになったのか、そして、その指導の内容が社会的にどのような意味あいをもつものであったかについて、私は本誌の皆さんには告白をしなければならぬ責任があるように感じるのであります。

先生が宗教学者として、はたまた宗教者として偉大な足蹟を残されたことは周知の通りです。しかし、先生が戦後の放送に大きな指導的役割を果たしたことについては余り多くは知られていないのではないかと思います。少しくそれらの事情を明らかにして本誌の皆さんと共に先生の恩顧

を温めたいと存じます。

世間一般には、自らマイクやカメラの前に立って直接放送に出ることが、放送を通しての社会との結びつきと考えられているかも知れません。しかし、私達から申し上げますと、もっと別の角度から大きな放送を通しての結びつき方があるのです。たとえば、友松円諦先生は自らマイクを通してすばらしい放送をされたことによって有名でありましたが、これに対して、真野先生の場合は、世間一般には少しも知られないで、しかも放送の企画、編成そのものに大きな指導と影響を与えられたのであります。そして真野先生のような場合には、人の耳目にはふれませんが、先生がお亡くなりになっても、その放送が続くかぎり先生の精神はいわゆる「法」として放送番組の内なる根源に溶けこんで働き続けるのです。それでは、真野先生がどうしてこのような放送との法縁を結ばれることになったか、そのいきさつと、今日のマス・コミというものの仕組みと性格について申し述べさせていただきます。

今日のマス・コミは代表的な新聞、放送でさえ、必ずしも新しい現代のマス・コミ理論で制作されるとは云いきれない実情にあるのです。それはどういふことかと申しますと、現代の世の中の仕組みが大変大きな広がり、複雑な

関係に結ばれ合い、しかも、それがものすごいスピードで活動していますので、日々、目にふれ、心にふれる事柄がその現象だけでは、あたかも氷山の一角のようなもので、きわめて小さな部分に過ぎない場合が多いのです。そして私達マス・コミに従事する人間は、常にこの「氷山の一角」を手がかりにして仕事をしなければならない人種なのです。すなわち、この「氷山の一角」をどう解釈し、どう扱うかによって各々マス・コミの性格や色合いが出てくるのです。

一口に氷山の一角と申しても、これがなかなか厄介なしろものなのです。私達はこれを「事実」と「真実」という言葉で区別しています。すなわち、氷山全体を真実とすれば、一角の事実に当るのです。事実だけいくら寄せ集めても真実にはならないのです。

私達はこの事実から真実を探索しなければならないのです。

私達が社会の事件や現象を、ただ機械的に客観的に正直に国民に伝えるだけでは、マス・コミ人としては落第なのです。

私達が事件や現象を扱う裏には、その事件や現象がもっている真実性を十分につかんでいることと、それを世の中

に公表することの社会的責任を自覚していなければならないのです。しかし、ややもすると、今日のマス・コミは、その企業形態が巨大化して強大な権力をもち、社会に対して一方交通的になり、独善と切り捨て御免におちいるのです。

殊に日本のように、民主主義の社会的倫理慣行に不馴れな国では、西欧生れのこのマス・コミの盲点に弱くて、マス・コミに操つられたり、圧迫されたりしていても案外のもんきで気がつかない場合が屢々起こるのです。従って、責任あるマス・コミはその内容を発表するに至るまでには、できるだけの方途を構じてその内容についての真実性と社会的責任を確立しなければならないのです。

今日のマス・コミには拙速は許されたいのです。万一私達の放送内容が誤っていた場合には、その伝播の早さと広さから、国の内部への影響の大きさは、昔の人々にはとうてい想像もつかないような仕組になっています。それ故、私達が番組を制作するためには、外部の方からでもできるだけ適正な助言と指導を受けて、内容の吟味をはかるのであります。

殊に宗教や人生の問題は複雑でむづかしいものです。

眞野先生は、さすがに西欧社会で生活されただけあつ

て、このマス・コミの現代的性格について全く勝れた識見をもっておられ、永年に亘って、NHKの宗教、人生に関する放送の諮問委員として尽力して下さったのです。自らマイクの前に立つことより、むしろ、放送そのものを指導することによって受信者との法縁を結ぶという行き方に先生の面目がうかがえるのです。

この諮問委員は六名ですが、私が最も多くの相談を願ひ、助言を受けたのは真野先生でした。それは先生が常に新しい思想と文化についての高い理想を持つておられたからです。現代仏教についても、ただ古い經典を現代語訳に置き替えるというような陳腐な考えではなく、仏教の新しい現代次元への展開、すなわち昭和新时代の理念を持つておられたと思います。

私は仕事のことや、あるいは何か心に疑問が起きたりすると先生のお宅へよく邪魔しましたが、私ごときものに、何時間でも話相手になって下さった。今思い出しても勿体ないような気がいたします。

宗教の放送は普通の番組編成では聴取率がなかなか上らないものなのです。所がこの宗教放送を何か方便をめぐらして番組の形も整い聴取者も満足するような番組を考えようということになって、諮問委員の助言を得て新設した番

組が人生続本でした。

この放送は今年で満十年になりますが、益々好評を増しています。しかし、この人生続本のアイデアについてその基本構想を相談したのは実は真野先生であったのです。

先生が広い視野から、常に内外の思想、文化に関する新刊書に目を通しておられたこと、そして、するどい現代文明に対する批評眼を持つておられたことを思い起していただけば、なぜ私が先生のお宅を屢々お訪ねしたのか理由がわかっていただけるのではないのでしょうか。人生続本編成の要諦は精神文化の構造分析とその新しい創造への志向にあったからです。

あの先生のいろいろな角度からの現代文明評論など生涯忘れることのできない楽しい想いとなるでしょう。

しかし、望むらくは私の立場からはまだまだ先生の指導を仰ぎたい大きな問題が残っていたのです。

日本におけるテレビの受信者数は昨年十月で一千二百万を超えて米国に次いで世界第二のテレビ国となりました。

これにラジオだけの受信者六百万を合せると、日本の全世帯数に対する普及率は八七・一パーセントに及んでいます。このように日本では異常に発達したマス・コミが国民の生活、文化、教育にどんな影響を与えるかについては今

さういふまでもないと存じます。しかし実は、このマス・コミの異常に対して、日本の宗教界は目をつぶっているのです。

私は各宗教々団が、今行っている残飯整理のような粗末な宗教放送をやるくらいなら、潮のように国民の上に押し寄せているマス・コミそれ自体の指導と、マス・コミの中毒症状から国民を守るための活動を考える方が、どれだけか宗教本来の面目にかなうのではないかと思います。それにつけても、真野先生がご健在なら、とまことに残念の情にたえません。

しかし、こうして真野先生との十数年のお近づきを通して、最も感銘しましたことは、私達の温い人間関係を超えて、先生の精神が私と放送を通して法となり真理となって宇宙に遍満して行く、先生はそれに対して何の求める所もないし、それ自体の具体的形もない。しかしそれが多数の人々の心に常に作用して、先生の亡き後々までも止まないう。即ちこの冷厳な仏陀の教法の理を先生を通して戴かせていただいたことは何にもまして有難いことでした。

※

※

真野正順氏略歴

明治二十五年六月 誕生

大正 五年 三月 宗教大学卒業、浄土宗内地留學生に任ぜらる

同 七年 天光院住職拝命

同 八年 六月 東京帝大文科哲学科(選)卒業

同 十年 浄土宗留學生として渡欧、英国オックスフォード、マンチェスター

同 十一年 カレッジに入学

同 十二年 十月 独国ベルリン大学に入学

同 十三年 三月 帰朝

同 十五年 四月 宗教大学講師となる

昭和二十四年九月 大正大学教授となり、以来、高等師範部長、学部宗教学主任等歴任

同 二十六年三月 大正大学学長に任ぜらる

同 二十七年 学主任

同 三十七年十二月 文学博士

寂、行年七十才

真野先生の思い出

佐藤 密雄

(大正大学教授・文庫)

一

先生は渡家の出身で、幼名は倉人、お父さんは陸軍少将で貴族院議員であった。明治の中頃の勅選貴族議員は当時のいわゆる高位高官であって、先生は文字通りの名門の出身であった。私共の知っている先生の兄弟には満洲軍司令官、仏印軍司令官、上海工部局長をなされた方々があったが、これらの方々と同様に、先生の英才であったことは論ずるまでもない。真野家と渡家とは血縁関係はなかったと考へられるが、近世の歌人であった天光院住職真野順戒さんが渡氏と親交されていて、先生が天光院法嗣となる機縁が生じたのであろうか。天光院も亦た、紀州御殿と称せられて増上寺塔中の最高位にあった名門である。

先生の宗教大学での専攻は不明であるが、東京帝国大学の卒業論文は恵心僧都の研究であったと聞いている。どんな内容であったか知り難いが、生前に新しい仏教を説きつつ、最作に正年往生をされた先生の生涯の、最初の学問的出発が恵心僧都の研究であったとすれば、将しく「往生之業念仏為先」をば生涯の始終を通じて全うされたことになる。

先生の欧洲留学中に何を専攻されたかについても不明であるが、英国ではカーペンターに師事されたのではなからうか。それは、先生がよくカーペンターの「キリスト教と仏教」について語られたし、彼はまた先生の尊敬された恩師である姉崎正治先生の英国に於ける師でもあったとされるからである。先生は日本オックスフォード会の会員であったが、独乙ではどこへ学ばれたか私はついぞ聞きもらした。然し独乙で勉強されたのは主としてシュラエルマッヘルの宗教哲学であった。私共が先生の御宅で読書会をした時の最初の輪読書もシュラエルマッヘルの宗教哲学であったし、その頃、先生は既にこの宗教哲学の全訳の原稿をお持ちであった。もはや三十数年を経たことであるが、戦災を免れて残っているとすれば、一部分でも何かに発表したいものである。

先生の専攻は宗教学であった。そのライフワークともいえるべきものは、仏教に於ける宗の意識の成立の研究である。原始仏教から日本仏教に至るまでを対象として研究されたものであるが、仏教が浄土教に帰結すべきことも、この研究によって真付けられた。

二

私共は昭和四年

の秋に先生をようして鬼怒川温泉に遊んだ。その年の春から、大正大学の第一回卒業生が、毎土曜の夕方から先生のお住居の、いまでも天光院にある建物であるが、二階に集合

在りし日の運動会の一風景



して読書会をし、先生の指導を受けていた。佐藤賢順、佐藤良智、佐藤密雄、栗本俊道、静永孝英、中村康隆、佐賀一海、田中芳全という人々で、その翌年には大正大学第二回生の大館信鏡、赤尾光雄両君に、巴里帰りの岡本貫栄君が加って土曜会となるが、鬼怒川へ遊んだのはその第一回生で、田中芳全君だけが不参であった。午後一時頃、当時鬼怒川で最大の旅館であった麻尾に着き、痛飲することになったが、このとき程元気で開放的な先生に接したことは、勿論空前であったが、その後もついに一度もなかった。夜半近くまで飲み且つさわぎ、夜半から旅館の外で二次会をなした。当時鬼怒川は二軒しかなかったカフェー兼業の飲み屋で、二隊に分れて幾度か交互に入れ替って飲み数軒を遊び回る効果を上げた。私共は僅かの会費を払っただけであったから、この時の先生の負担も大変だったと思う。先生も若く、私共も未だ独身時代で一夜を遊び明し乍ら、明日は更には川治温泉迄歩いた。川辺の男女混浴の野天風呂であったが、すき逆った温泉の中で田舎娘と混浴して夜来の酒気を洗い落した。おおらかな時代の空気の中で、大陽の光が温泉の底まで照し出していたが、この時の先生はたしかに若くあった。

先生のスキーについては、私共同行者が、先生の奥様か

ら叱責を受けたのであるが、それは二年連続のスキー行の直後に先生が病気になるからである。私共はそれを感じたくないが、私達以外の者は、スキーが先生の胸の病気を誘発したとする。昭和五年の暮れ近く、土曜会の赤尾光雄君をリーダーとして、リンデン・スキークラブも結成した。先生はすすんで会長になられた。土曜会員の外には樹下信雄、樹下行雄、広本隆雄、大島泰雄、武田泰淳の諸君も加っていたと考える。第一回はシュナイダーの命名したスロープがあるというので長野県の野沢へ、次は山スキーの訓練も出来るというので山形県の五色へ出かけた。但し、赤尾君を除く会員はいずれもインドアスキーヤーばかりで、ゲレンデでは転倒を繰返すのみであってとても山スキー等は望むべくもなく、リーダー赤尾君が大苦勞をしたのである。然し先生は熱心で、出発前にスキー理論を勉強して出かけ、スキー場では転倒することも平気であった。夕方に宿に帰えるとサロメチールを体中に塗布して体加のかいふくを計り、充分にすいみんして、明日はまた先登に立って練習にはげまれた。二回とも一週間の日程であったと記憶する。当時スキーは今日程には普及していなく、やや貴族的なスポーツであり、且つ新感覚派的なスポーツであった。ノーブルなそして新歩派である真野先生の人柄にマ

ッチしていたのである。同行者の中で、スポーツに無精で一日すべっては次の一日を宿で読書していたのは岡本貫栄君であったが、真野先生はこれを評して、「彼はフランス帰りのおしゃれの面目のためにスキーについて来たのだ」といわれた。適切に当時のスキー感覚が出ている言葉である。

三

先生は病気になる迄、毎年夏期を避暑地で過ごされた。山中湖畔に、ホテル管理の別荘を年間通じて契約して御出になって、毎年そこに出かけられたが、時には沼津の保養館にも滞在された。私は、多くは中村康隆君と同行であったが、毎年避暑先へ御伺して二、三日滞在させて頂いた。沼津では豪勢なかつを釣りの話を伺い、先生と俱に何度か漁船をやとって出かけるが、然し私共の出る度にかつを留守であって、先生の話と事実との一致することはついになかった。

然し先生は釣りは好きであった。法然上人鑽仰会の出来た頃、何度か中村弁康氏の招きで清水湾へ御出になったが同行の先輩の話をきいても余り上出来ではなかったようである。私共土曜会員も先生を先登に同じ清水湾で釣をした

が、先生はその時に蛸を何匹が引懸けられた。蛸は魚でないから釣りではないというのが私共の意見であったが、先生は蛸を釣糸で上げるのこそ釣の極意とされた。先生の釣の手並みはその程度のものであった。ゴルフは庭園でクラブを振って居られたのは幾度か見たが、これは実らなかったらしい。

然し英国製の打球用クラブはいまま天光院にあると思う

四

先生は熱海へも屢々御出になった。避寒の場合もあったが如くは原稿造りである。先生の論文も文章も文字通り彫身縷刻して出来上るのである。先ず構想を練りに練ってから執筆されるが、その文章がまた凝りに凝って出来上る。先生の所へは、学者は勿論のこと事業家や政治家も訪れたが、それ等の人々はすべて先生から着想・構想・見透しを学び取るためである。そのことは、今日の仏教界の近代的運動のほとんどが陰に陽に先生のアイデアに基づくことからも推知出来ることである。この泉の如く湧き出るアイデアが、先生自身の論文や文章の場合には、それがかえって完成への進行を妨げたのである。その代りに、出来上ったものは、一見平凡であって、然しよく味うと実に絶品の風

格がある。何事についても、一見平凡に見えて然もよく見ると、優秀で気品あるように演出するのが先生の好みであった。

先生のなされた学界仏教界に対する功績は今述べない。ただ先生が最近に病中から寄せられた手紙に、「余命が与えられ、なほ机辺に寄ることが出来るならば、仏教についての多年の考えを書き留めて置きたい」という一節があった。先生が三十年の闘病生活の中で、学問的成果を上げ、仏教運動を指導し、そして最後の死の直前迄を、口述し乍ら努力し精進せられたことに対しては全く敬伏する。先生の臨終は文字通りの念仏往生であったときいた。念仏の声の細まると共に静かに命終されたと言われる。私はこれを聞いたとき、それは昭和の初めの頃であったが、近世の高僧野沢俊閑僧正の臨終を先生と共に見た時のことが思い出された。当時の教学週報に、先生はこの時のことを、「伝へ聞く高僧達の臨終正念の姿をいまこの目でまのあたりに見ることが出来た。実に有難く思ふ」と記された。その時以来先生には生死の一大事について期するところがあつたのであろうか。理性によって納得される宗教、科学理論に堪える仏教を主張された先生が、浄土を胆仰て正念往生されたことを、私共は有難く思い学ばねばなるまい。

道はせまく

竹 中 信 常

(大正大学教授・文博)

一

日支事変の頃「片肺飛行」という言葉がはやったことがある。日本の双発爆撃機が片方のエンジンをやられて、残る片方のエンジンだけで無事に帰還して来たことが再三あった。当時、日本の飛行機の優秀さと操縦士の卓拔さが喧伝されたものである。わたくしにはこの「片肺飛行」という言葉がもっと切実なものに感じられたのである。それは

真野先生が文字通りそうであったからである。日支事変から大東亜戦争にかけて、先生は永い闘病生活のさなかにあった。茅ヶ崎の海岸近い松林の中に建てられた否雲堂病院へ、十字架上のキリストのような風貌をたたえて療養されていた先生のところへも時々お見舞にあがったし、やがて

天光院に帰られて、奥の書齋で休んでおられる枕頭へも屢々お邪魔したが、巷間は戦争の渦にわきかえっていても、先生の床辺は常にしんと静まって、そうした世のざわめきをよせつけぬ峻厳さをたたえていた。

これは後の話であるが、終戦後しばらくして、何度目かの病状の起伏のひとつがあった。原因不明の熱に悩まされておいでになった頃、丁度わたし自身も右肺炎を犯されて気胸療法を試みていたのだが、先生の発熱の話からレントゲン写真をお借りして、わたしが診てもらっていた毎日新聞社の診療所の進藤嘉博博士にみせたところ、進藤博士は一目見て「これでよく生きておられますね」とびっくりされた。それほどに、先生の片肺は犯されて崩れ去っていったのであった。まさに「片肺」であったのである。

こうして、先生は二十年にわたって文字通り「片肺飛行」をしておいでになったのである。それでなくとも、この病気が当時いかに難治であり、苦悩にみちたものであるか、四年の療養生活だけで悲鳴をあげていたわたしにとって、先生の闘病の姿はまさに超人的であり、奇蹟であるときえ感じられたものであった。

「きみ、この病氣は忍耐でゆくしかないよ」床の中から、逆に、こんこんと療養、闘病の心得をさとされたのも

このころのことである。そして「療養の設計」という岩波新書をくださったのである。この本はいまもわたしの書架の一隅にあって、時に無理をして変調を感じるわたしを、先生の代りににらみつけてくれているのである。

「意志の人」——先生のあの瘠軀からはこうした印象は出にくい、しかし、三十年に及ぶ病氣との闘争の歴史からするならば、先生こそ本当に、強靱きわまりない意志をもって生きた人というほかあるまい。

二

三縁山増上寺の巨大な伽藍が一夜にして灰燼に帰したのはその翌昭和二十年五月二五日のことである。その翌朝市電もとまってしまつて妙に森閑としている電車道づたいに、目黒からテクテクと芝公園まで歩いて、天光院を訪れた。十中の八九増上寺と同じ運命になったであろうと予期しながら、いつもながらに閉ざされている天光院の門のくぐり戸をくぐったわたしは、自分の目を疑つたのである。

そこにはいつもみなれた本堂とそれにつづく二階がチャントあるではないか。おどろきと喜びと二重に感じながら、玄関の戸をあけて、出てみえた奥さんの顔をみて二度ビツクリ。戦時中のことなのでモンペ姿に防空帽巾はあたりま

えのことだが、髪はボウボウとし、顔は大掃除のあとのようにススだらけ。鼻の両わきなど黒々とくまどられていて、ふだんキチンとされている奥さんとは人がちがつたような風態。昨夜の空襲ではムロン数個の焼夷弾がおちたそう。そのなかの一発が二階の押入れの天井におちて火を吹き始めたのである。——わたしも戦火で家を焼かれた経験があるのでわかるが、押入れの天井などにおちたのは絶対に消せないくらいである。それを、先生と奥さんと栄子さんと三人がかりで消しとめたというのだから、さぞかし大奮闘をされたことであろう。

「一生懸命、下から棒でつき上げて、焼夷弾をつきおとしたのだが、いくらついてもついても、どうしても一ヶ所だけ、まるくあかるくのこっているの、夢中になってつきまぐった。どうしてもおちないので、よくよくみたら、君、おどろいたよ。あまり一生懸命突き上げたので、とうとう天井から屋根板をとおして、戦火であかるくなった夜空がみえていたんだ。これこそ本当の『テンツクテンツク』だよ」

昨夜の活躍で横になっておられた先生は、微笑しながらこういわれた。

あのからだのどこからそんなフアイトが……と思うよう

なことが時々あった。終戦後直ちに教学院の復興に尽瘁されたものも、その一つである。いまだ物情騒然として、世間の人々が明日の身も知れずに右走左往している間で、先生はじっと腕を組んで教学の将来について熟慮されていたのであろう。やがて頃やよしと決断されて、いまだどの学会もその姿すらあらわさぬ昭和二十一年の夏、教学大会開催の準備に着手されたのである。物資は極度に窮乏し、建

物も多く破壊されてしまっていた東京ではとうてい不可能なところから「京都開催」に踏み切られたのである。切符こそ自由に買えるようになったとはいえ、ヤミ屋や疎開者などが横行して、列車という列車はどれも超満員で、窓ガラスをやぶってのりこむほどの混みようであった。その中を、戦争末期からどうやら小康をたもたれるようになったとはいえ、病弱の身を京都まで運ぶ決心をされた裏には、

一日も早く、教学を再建して、混沌し切った思想界を清澄ならしめようとの固い決意がひめられていたことは、わたしたちには痛いほどに感じられて、あえて譚意をすすめる勇氣を持ち得なかった。

当時、教学院のメンバーの大部分はまだまだ復員せぬものや、自坊の再建処理に奔命していて、わずかに、いま鎌倉の自坊にある吉田宣成氏が主事として事務一切を担当していたにすぎない。いよいよ京都出発がきまり、明朝の一番列車でということになり、吉田氏は鎌倉からでは間に合わぬので天光院に泊り、小生晩暗の中を東京駅へかけつけた。弁当と水筒持参の汽車の旅も、京都まで十時間近く



園児を前にして、こ満悦の先生。運動会にて。

かかったのでは、たのしいどころではなく、先生の体を気づかう心で一杯だった。それでも十一月の六日七日の両日を無事盛大につとめて、夜行列車に一睡もせず、新橋駅から、あけやらぬ戦災の街を歩いて天光院まで先生のおともをして帰りついた時には、本当にホットした。

この京都での浄土教学大会は、教学院として第一回のものであるとともに、他のいかなる学会にもさがけたものであり、文字どおり、戦後における日本の学術大会の口火を切ったものとして高く評価されるべきものであった。しかも、今日、大部分の諸学会が通例おこなっている学会運営の方式も、この時先生が企図され実行されたものの踏襲であり、ここにも先生の深い先見の英智が輝いているものである。

屋根をまでつき破って焼夷弾とたたかい、混惑の世相に先んじて学会を開催する。この闘志。これが先生の永い病床生活を支えて来た源動力であつたと、わたしはかく信じている。

三

思い出はつきない。しかもわたしの思い出は、わたしの人生を決定する一番大切な時期とつらなっているだけに、

他の人々にははかり知られぬ重みをもって、わたしにせまってくるのである。

大正大学に、はじめて出講を許るされて先生のもとへ、わたしは担当の「キリスト教概論」の講義内容をこまかく書いて持って行った。原稿用紙三十枚に及ぶ内容を、一度、庭の芝生の藤椅子に倚っていられた先生は、一々、刻明に点検して、項目を取捨してくださった。カトリックの「カテキズム」を貸してくださったのもこのときであった。蛇足だが、将来、わたしは新しい講座を担当することにその内容を話しに行った。先生が担当されていた「宗教学概論」を代講するに際しては、とくに念入りにプランを作ってゆき、先生もまた、しさいにこれを検討してくださったものである。ただ、「宗教心理学」の講義のプランだけは、それとはいわれなかったが、内容的に立入った指示なしに、「しっかりやってくれ」とだけいわれた。

こうして、学問の点でも、実に峻厳に、且つ詳細に、その教示を得たのであるが、真情を述べるならば、わたしとしては、先生にはむしろ学問以上のものを与えられたといいたい。

専門分野に関しては、むしろ、わたしは宇野円空先生に負うところが多い。宗教心理学はむしろのこと、民族学に

関する視野、特に一地方（わたしの場合はニュー・ギニアの民族と宗教についての総合的な研究方法については、あの膨洋とした風格の宇野博士から厚い教示を得たのである。これに対して、先生には、大学の講義という点でも、あるいはむしろ、そこに至るまでわたしを導いてくださったという点でも、ぬきさしならぬものを得ているのである。

ひと夜、われわれのみ仲間と話し合ったことがある。アルコールのめぐりとともに、先生達の棚おろしがはじまった。その一人が、わたしを意識しているかどうかしらぬが、いわゆる「真野批判」をやった。先生のアリストクラシカルな学風を解さぬ。世俗的な批評にしかすぎなかったのだが、わたしにはそれが腹にすえかねた。しかし相手は先輩である。わたしは、池袋からの帰路、目黒までの国電のなかでいくたびか引かえて、その先輩のところへ反ばかりにゆこうかと思ったことがあった。それは、学問のことも無論であるが、わたしにとっての先生は、生活のためいかなければわたしの「人間形成」の根源的な存在であったからである。わたし自身が侮辱されたことであるからであ

った。
「まなこはひろく、道はせまく」

この言葉を先生の口から聞いたのは、まだつめえり金ボタンの当時であった。将来、わたしはこれを守りつづけている。また、終生守りつづけようと決心している。そして、この言葉は、ワーズワースの

「理想は高く、くらしは低く」

という金言と似て非なるものであることを確信している。そしてまた、この言葉は、そのまま先生の一生に通ずるものであることをも固く信じて疑わないのである。

晩年、先生はその該博なヨーロッパ的知識を浄土宗信仰の一点に集中して、念仏信仰——法然教学の正統性を主張されることに専念された。学位論文にしても、「大法論」連載の「無量寿経講話」にしても、すべてこのあらわれであった。先生のいわれる「道はせまく」の「道」は、実にこの「念仏」の道にあったのである。

臨終された朝最後の息にまで、念仏を唱えられたということをおさんからうかがって、わたしは、あくまでおのれの道を堅持した、意志の人、闘志の人、そして信仰の人としての先生の御冥福を心から祈念したのである。

× ×

× ×

御法語をいただく

たまたま行を尋ねる者に、誨ふるに念仏の別行をもつてす。これを信する者は多く、信ぜざる者は少し。まさに知るべし、浄土の教、時機を叩きて、行運に当るなり。念仏の行、水月を感じて、昇降を得たり。

(選択本願念仏集第十六章)

たまたま人がきて、どのような行法を修し
たらよいでしよかと尋ねられれば、私(上人)
はただお念仏の別行を修しなさいと教え
ます。すると多くの場合はお念仏を信じるよ

うになり、それでも信じない者はごく僅少で
す。これを以てみても、浄土教が時代と人心
に適應したものであって、念仏の行われる機
運に際会したことがわかります。これはちよ
うど、天上の月が地上の水にうつると同じ
で、水が天に昇したわけでなく、月が地上に
降ったわけでないのに、水と月は互に感應し
ています。月と水が一体となるように、念仏
と衆生は一体となり、そこに少しの間隔もな
く一致相應しているというべきです。
行というのは諸善万行のことで、念仏の別
行とはお念仏だけを唱えて他の行を混えない
ことです。

このお詞は選択本願

法があるにしても、目の前で現に悩みまどつ
ている人々をみると、この人々の救われる道
はお念仏を唱えるしか方法がないという確固
たるご信念が溢れています。
だからこそ群集は上人の説く念仏の門に集
まり、その教えは燎原の火の如くまたたく間
に全土を風靡しました。南部の貞慶は、全国
に弘めたお念仏の勢を防止するには勅宣を得
なければ手のつけようがないと、奏状を奉つ
た位でした。

月はどうな山奥に行っても同じく皓々と輝
いています。水はどんな家庭にもあります。
この月と水とが一体となっている姿が、即ち
お念仏を唱える人の姿です。

彼岸の一句

(3月18日～24日
21日 中日)

雨風も彼岸になりぬ旅の空	日 兎
泣癖の乞食の親の彼岸かな	碧 童
賽銭の法衣にあたる彼岸かな	三 青
ほろほろに糠こぼるる彼岸かな	子 規

念仏集の最後に出てい
ます。上人は選択本願
のお念仏について、詳
細に論じ来り論じ去
り、そして最後に深い
感慨をもって、お念仏
と衆生を水月に論えら
れました。四万八千の
法門に幾多の修行の方

信仰は学問によって得られるものでありま
せん。阿弥陀さまの本願を信ずるかどうかに
よってきまります。炎は空にのほり、水は谷
に降るように、理屈でなく、上人はこれを法
爾の道理であると申されたいです。即ち罪惡
にみちた衆生がお念仏によって救われ、仏さ
まの来迎を得られることは法爾の道理である
といわれるのです。

村瀬 秀雄

真の宗教心

宮 沢 善 正

(神奈川・正親寺、住職)

「彼岸中の一日の善行は余の百日分の善行に勝る。彼岸七日の善根は七百日の善根にあたる。」と言うことが、古い仏典に説かれています。年に二度ずつのお彼岸は季節的にも好調に恵まれ、私達の正しい修行をすすめる為には又とない好機と申せましょう。

年来私の寺ではガリ版刷りの細やかな冊子を、盆、正月、春秋の彼岸に定期的に刊行し、今年で十四年目を迎えるに至りました。初めの中はお寺から何かプリントが来たぐらゐに簡単に考えられ、ホイと捨てられていたようですが、繰り返し、繰り返し、飽きず、弛

まず、十年程経ちましたころから、お盆に伺いますと「これを読むのが楽しみで」とか、お彼岸になりますと「これを頂戴するのを待っていました」というような声を所々に聞くようになりました。そして最近ではもう皆さんがよく読んでくださいます、色々と感想などもお寄せになります。

この小冊子を私は和順と名づけています。初めは和合と呼びましたが、新大師号御加護を記念して「和順」と改名いたしました。檀家向きの啓蒙誌として役立てるために、その内容には私の古い伝統的な知識と、息子た

ちの近代的な考え方や判断をミックスしていくように努力しているわけです。

春秋のお彼岸には私は此の小冊子を通して二つの事を訴え続けて来ました。言葉ずかいは違いますが内容は常に同じことで、その一つは、お念仏を称えることとその意義と安心について、その二つは、彼岸の四つの行事開法、施行、放生、墓参についてです。

日本で宗教的でない宗教行事が三つあると言われます。お祭り、盆踊り、クリスマス、だそうです。神仏キリスト三大宗教にまたがる日本国民のこのような宗教的無節操は、国家的、民族的見地からも実に由しい問題を含んでいると思われまふ。正しい意義とあり方が、日本国民にはあまりにも教育されなさすぎるうらみがありました。人誰でも心の底に宗教的感情を持つてゐる筈ですから、それを不断に刺激して宗教的欲求に正しい糧を与える仕事は宗教家の職務と申せましょう。そのような考え方から、私は私なりにできる方法で、私自身がやっている、私自身がやれることは何かを考えて見ました時、前に述べた二つの事に思いあたったわけです。これは私

に自信があります。そこで力強く皆様におすすめすることが出来ます。どうやら私が予期した効果が現われたように大変うれしく思っています。

一昨年の秋ですが、私の長男が県教育委員から派遣されて欧米の教育事情を視察にゆきました。欧米諸国の公教育の全般にあり視察研究するよう命令されて出かける長男に、私は併せて諸国の宗教事情、家庭教育の基本にあるものの探索を私命として与えました。

帰国後、長男の報告などから諸外国の事情を判断して、私は二つの問題を考えてみました。その一つは家庭における宗教々育です。外国人は幼少の頃から家庭生活の中で宗教的薫陶を受けているということです。日本でも田舎ではそういった事も多いと思いますが、都会において、しかも、あれこれと雑多な宗教に依らず、その家つまり父母によって一つの信仰による訓育が良くなされています。この訓育の力が、地域社会の浄化や野生の動物の愛護に至るまで彼等の道徳的な生活を支えているのではないのでしょうか。

第二は前の問題の根底にあるものとして、聖書を中心とする宗教々育の徹底を忘れることができません。

聖書を中心とするという事は意義を確めることです。歴史や伝統を大切にすることにつながります。国や民族にたいする愛情がこうした所に起源をもつのかも知れません。そしてキリスト教の情愛主義がそうした国家愛と世界愛に引き上げていくのだと思います。

私はここに至って深く反省しないわけにはいきません。私たちが信奉する仏教の伝導の方式の中で枯渇したものが、このような外国の異教徒の生活の中から見出そうとははずかしい事です。

お話を前にもどしましょう。私がここ数年繰返し檀信徒に訴えつづけていることは、そのような意味で日常諸事の中に宗教的な意義を確認しながら生活して進むということです。物一つ動かす時にも布施の意義を確め、新聞を読むときに開法を高め、物を食うにあたり放生を思い、自己の生命、祖先、

伝統に対し尊敬と発展の努力をばらうということです。そしてそれらの根本にお念仏の真意を伝えてゆくのです。

現代のような忙しい都会生活の中では他に適当な手段が見つかりませんので、私はお寺の機関誌を通してやっているわけですが、一十年ほつほつ私たちの真意が信徒に伝わり、心の底なる宗教心に呼びかけができるようになってきました。

仏徒としての覚醒が日本国民全体に起ってくれば、我国の発展は火を見るよりも明らかでしょうし、道徳も政治も行政もスムーズにゆくでしょう。このような結論は理想主義で飛躍していると笑われるかも知れませんが、宗教家である私どもと、仏に救いを求める仏教徒が現にここにある限り、現実として達成しなければならぬ使命と断するわけです。真の人づくりの一番根底にある条件として、国に役立ち世界に有為な日本人づくりを、私はこのように考えています。

合掌

アメリカ旅行

(9)

佐藤 治子



ルレイの洞穴の一部

ゲスト・ハウス

十月十四日の朝ブロンクスビルを出立。ニュージャージー、ダルウエア、メリーランド州、そして首都のワシントンへ着いたのは午後二時頃であつたろうか。小雨の官庁街を通り抜けてヴァージニア州へ入る。軍隊の基地ベントンガンを通りシエンドアと云う国立公園にさしかかる。山一円が国立公園に指定されている。ヴァージニア州のリングはシコシコしておいしいときいていたが小粒であつて、籠へ入れて道路近くに簡単な台を設け、その上

にいくつかの

籠を並べ売っ

ている。アメ

リカの農村の

人達は老人や

女の人等が副

業としてい

んだなと思っ

た。山上のモ

テルが満員で予約出来なかつたのでふもとのルレイと云う町へ入った。モテルと云うサイ

ンがあちこちに見え出した。「あそこはよくない」「ここは町角に近すぎる」など、探し乍ら小さい町を通り抜けてしまった。

町も小さいし、やはり山上のモテルを契約出来なかつた人達と、次を書く洞穴をみに来る人達でモテルは案外利用されているのか、もう一度引き返えして一変よいと思われた所へ行つた時にはもう「ノー・ヴェカンシイ」(空室なし)とネオンがまたたいていた。一本道が中心になっている町なので行つたり来たりして少しマリオンはいらだつて来た。もし車が来なければとても町を行つたり来たり出来ない事である。

小さな町にはモテルにあぶれた人、二三流のモテルではいやな人の為、個人の家庭が即席モテルとして営業している所がこの町に何か所かあつた。いやなモテルよりはこの方がよいかも知れないと今度はそう云う家を探した。「ゲスト・ハウス」と云う札が立っている。前庭に若壇がありきれいな家だと思つた。庭へ車をのり入れた。交渉に入つていったマリオンは主婦と出て来た。老婦人で無愛想であつたがわるい人ではないらしい。とまる

事にきめ、二階へと案内された。南部の旧式な家なのかも知れぬ。北部の人には割合に冷いときいていたので、その老婦人の態度でなるほどとうなづけた。ベツトは旧式で少し高く、ベツド・カバーもいかにも昔から伝来のように、ぜいたくなもの。未亡人かも知れないこの老婦人の余生の生活の費用の足しにこゝう云う職業を始めたのかも知れない。

専門のホテル業とちがい、一寸泊めて上げますよといった態度をみせるのは、ニューヨーク人のマリオンに対してか、珍らしい物をきている異国人の私に對してかしら。奴隷開放以来の一部のかたくな南部の老人達の心に残っているしこりの為であるにちがいないと今にして考えられる事である。ホテルと同じに部屋代さえもええばノータッチでよいのだから、無愛想であつてもこちらは平気である。二人は旧式な部屋に荷物を入れて町のレストランへ夕食に出かけたのである。

おそく帰えつて来たら他にも車が二台ほど止つていた。やはりおそく来てホテルに泊れなかつた人らしい。

ルレイとキャバーン（洞穴）

翌日見学することにしていた大洞穴を、ルレイへ泊ることになつたので、宿を先ず探して落付き八時に閉めると云う洞穴の事務所まで急ぎ車を走らせた。洞穴で一番アメリカで大きいのはニューメキシコにある。ルレイのは二番目に大きいもの。入場券を買つて奥の階段を地下へ降りる。私達の下りて行つた広い所には十数名の人が説明の始まるのを待つていた。コツコツと階段を降りる足音だけがひびく異様な大きな洞穴。説明者をかこみ周囲を見廻し乍ら説明をきいている。若い青年は早口で特種なアクセントでしゃべり出した南部の英語なのだ。私は所々しか分らないので説明書のような物を買つて行けばよいとあきらめてしまつた。そつとあたりを見廻すと洞穴へ入つたのは初めての私には鐘乳洞と云うのはこの事なのだと思つた。天井からお乳のようにたれ下つてゐる石灰石。所々に下からも太くて丸太棒のような形のもので、二〇キニ

ヨキと立っている。まわりも幾層にも、或いは部厚く或いはキノコの傘を広げた様な形のものが壁の様にしきりになつてゐる。こう云う部厚い層が幾つもの部屋を形造つてゐるのだつた。

ここには地下を流れる川によつて何万年もかかつて、形成された石灰石の洞穴なのだ。石灰石と土の層の間を絶え間もなく流れる酸性の水で、土はだんだんと運び去られ石灰石のかたまりだけが石の様にのこされ、部屋の様な形になり或いは通路の様になつたのである。この水が天井から床にたれる時、水の沈澱物「をり」がたまり鐘乳石（石灰洞の天井より水柱の如く垂れた炭酸石灰の沈澱物）と



洞穴内のホールの一部



石灰乳の様なカーテン

なり（つらら石と云えば簡単である）下で沈
澱した物は上へ向けて石筍（石灰洞の底に筍
の如く立てる棒状の石灰沈澱物）を形づく
る。そして上下がつながると円柱となる。

どれだけ年数が立っているものか、実に一
大驚異であった。なぜなら約一インチ發育す
るのに百二〇年かかると云うのであるから。

私達は広間へ案内され細い道路を通り又次
の間へと導かれる。灯りは上手に配置された
電線によって明るくはなっているけれども、
ただの如く幾重にもなっている鐘乳石、そし
て長く或は短くたれている鐘乳石のため、全
体は薄暗い。広い天井から芝居のドン張の様
な巾が広くすしんと低くたれ下っているも所

ある。通る路も背の高いマリオンはくぐる様
にして歩るかなくはならない所もある。各
部屋が名前をつけられていて「王座の間」と
か「巨人の間」或は「プリンセスの円柱」と
云う風にそれぞれなるほどと思わせるような
名前をもっている。

洞穴内の温度は一年中一定していてアメリ
カで使われている華氏で云えば五四度。日本
式なら摂氏十二度にあたる。湿度もない。水
がボタボタと落ちて来ない。粘土で固まっ
た様な通路を次々と案内され、所々階段があ
って、地表よりだんだん深くなって行く。

思わず「まあきれいだ！」と足が止ってしま
った。そこは天井がひくくて大小無数の鐘乳
石が一個所に池の様にたまった澄み
切った水に影をうつし、灯りの反射
で水の中にお城の様な影が浮き出て
いる。「夢の湖」と云う名の通りあ
まりの美しさに水に手を入れて中の
お城をさわってみたい気がした。
「ボール・ルーム」と名付けられた
広い広い所の一個所にはパイプオル
ガンが備へられている。私達がそこ

へ入ると静かな音楽が奏せられる。長く短く
無数の天井よりたれ下る乳白色の鐘乳石にこ
だまして音楽も深みを増して何とも云えぬ神
秘さをたたよわす。このルームは地表より二
百或は三百フィートの深い地中にある。静か
で一寸動いても全部に空気が伝わって行くか
に感じられた。

一体どの位の広さの部屋かしら。丁度旧丸
ビルの一階の半分以上もあるのではないかし
ら。高さは高底があるけれど、大仏様の胎内
で上を見上げると同じ様にして見上げたこと
と三倍以上もあるようである。立っている
人間が小さく見える。ゆっくりと一間一間を
全部みてまわると四時間もかかると云う所か
ら考えても、実に大きく広い地域がこの洞穴
になっているわけである。妖精でちよこち
よこ出て来そうな錯覚にとらわれる。一人で
ほんやりしてもし皆がどの方向かへ行ってい
ましたら出口はどこか、大たい綱が張っては
あるけれど巨大な崖やカーテンの様になって
いる鐘乳石のかげの小径を伝って行くのは
きみが悪い。

細い橋の様になっている小径を通る時、小

さい池の様な水たまりがあった。ほのかに池の中にお金が沢山沈んでいるのが見えた。願ひ事がかたうと云う伝説なのだそうで、皆一セント、五セントと投げていた。私もここまで来た記念に一セントを投げ入れた。

ワシントンより九十マイルはなれたルレイの、この洞穴は一八七八年の八月の或る日、三人の人が近くの小さい洞穴をみに来ていて、もっと大きく美しいのが近くにありはせぬかと好奇心をもった。三人の中の一人アンドリュー・キヤムベルと云う人が小さいわれ目から冷い空気が洩れているのをみつけ、割れ目を広げ、そこからロープで地下へもぐりこみロースクの火で世界中で一番美しいと云われるこの洞穴を発見し、その美しさに目をうばわれたと云う。

ニューヨークを出立し、この日は約四百マイル走りワシントンより国立公園の山の途中より下った麓のルレイと云う小さい町に、この夢をみている様な地下の洞穴をみせてもらったのである。アメリカの人だつて未だ未だ知っている人は少い所を私の為特別スケジュールを組み、この小さい町に何万年も前から

あった、しかも、発見されて八十四年しかたっていない天然の美の世界へ案内されたのである。

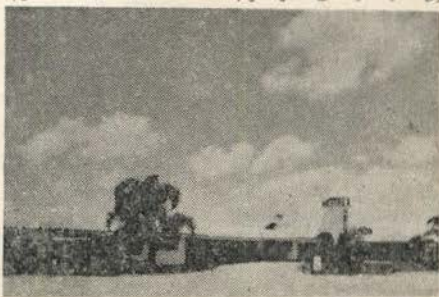
地上へ降り立つと云う言葉はあるが、地下から地上へ戻って、夜露に冷々としている外へ出ると、国立公園となっている山々のふもとに町の灯が点々と見え静かなそして美しい夜景であつた。

モテル

日本を立つ時ロスアンジェルズでホテルはどこがよいかしらとあちらへいらした方にたずねた所、「ドライブされるのでしょうか。車で旅行するにはモテルが一番便利で、ホテルへ泊ることはありませんよ」と云われた。丁度シーズンオフなので殆んどモテルは予約なしで泊られる。

この国立公園の山上のモテルだけは、マリオンが一週間前に問合せたがもう空室がないと云う返事につながりしていた。広い広いアメリカをドライブ旅行するのにこんな便利なものはない。やはり上中下と種類があつて、各級のモテルの階級別のマークが入口の所に

かけてある。モテルばかり



ガレージつきのモテル。フロリダのノーブルス

それで一応目ほしをつけてそこへ行つてみる。道路に面してモテルと赤く電気がついている。その下に「ヴェカンシイ」とネオンが明滅している。その時は「空室あり」と云うことで、満員になると「ノー・ヴェカンシイ」とかいてある。それを見ると次のモテルを探す。一つの町にモテルはあちらにもこちらにもある。

大きな都市になるとモテルもホテルの様に大きいものもあつて、広いガレージが階下にあつたり中々デラックスである。一日に三百マイル以上も走って二三日もかかる場所へ行

くには殆どどのドライブバーがホテルへ泊る。婦人一人でも安全に長距離旅行が出来るわけである。先ずこれはよいなと思うと車を事務所前へ止め、交渉する。そして部屋をみせてくれるので気に入ると、事務所で一泊の料金（Aクラスで一人約八ドルか十ドル位）を払う。日本金で十ドルと云えば三千六百円になるから安いとは思われない（二人一緒の時は一人分より安くなるそうである）。でもあらでホテルへ泊るより安いし、簡単である。翌朝出立の時支払う所もある。

さて室の鍵をもらうと車へのり、その室の前は一台づつ駐車出来るようになっていたから、そこへ車をつけて荷物を部屋へもち込む。それで一段落でドライブに疲れたマリオンに私は早速電気のコードの先にとりつけられた金具をコップに入れてもう一方の先をコンセントにさし込んでおく。そうすると三四分位でお湯がわく。キュース、お湯のみ二個、とお茶の罐をもつて行ったので、それでお湯であつくまっているコップを備へつけの小さいタオルでそっともち上げ、お茶の葉を入れたキュースにすればらくに日本茶がのめる。長

いドライブに疲れた私達に、このお茶は本当に疲れをとるのでかかすことの出来ないものであった。部屋は大小ある。大きい部屋にダブルベッドが二台備へてある所が多かった。家族が旅行するに一緒に一部屋に入れるからであろう。部屋の中には大いテレビがあったが、洋服ダンスは無かった。と云うのは、ドライブ旅行で次から次へと泊って行く旅行者には必要がないからである。

小さい部屋はシャワーしかついていないらしい。シャワーのきらいな私の為、マリオンはバス付きの部屋を探すので割合部屋は広く居心地がよい。いつもこのバスタブで疲れがとれたのであった。北部ではプールの必要がないけれど南部ではプールがあった。長方形の土地の道路に面した方だけあけて、三方に平屋建の建物が細長く建てられてあり、その部屋の前には車をパーク出来る。広々と土地をとつてあるのでその中央にプールがつくられてある。勿論二階建てのホテルもあるが、トランクを出したり積み込んだりするのに、私達は一階をえらんだ。

食事はレストランへ行つてとる。ホテルに

付属し

ている
レスト
ランも
あるが
ホテル
があり
そうな
場所は
静な所
で道路
の左右

に幾つかホテルがある。その中心にレストランが二三ヶ所ある。近ければ歩いて少し離れていけば又車で夕飯を喰べに出かける。主に旅行者が多くなるので服装も旅行着のままてよいわけで気軽に入れる。チョッキリ帯の私はいつも半羽織をきて行く。

中へ入って席へすわってからぬげばチョッキリ帯の後姿は人から見えないから、もち歩るきも軽いし、よいものを持って来たと、日本着物の旅行者にかかせないものであると思つた。朝は出がけに又レストランへ行き朝食



スカイラアンドドライブウェイより。マリオン。

をすませ次の目的地へ向け出立する。ぜいたくなホテルは一部屋毎にガレージがあるのでそこへ車を取り入れ室の横の戸を明けて部屋に出入りが出来る。こうして早目に町へ入るとよいホテルが自由に探せるし、部屋をきめてしまへば気楽に外へ出て行つて見ることも出来る。皆旅行者故隣室でわいわいさわくこととはないし、おそくついて車をパークする音はきくこともあったが疲れた身体を休めるには又とない場所である。

日本へ帰ってからのこのホテルを日本で作



山々。すなわち見よ。ワイブドライブ。

りたいと話されたある大きなお菓子屋の若主人があつた。私は「日本のようにせまい国では不向きではない

かしら。それとレストランも、作らねばならないし、第一日本で三百五十マイル以上走ると東京から大阪位まで行つてしまふし、それなら途中に静岡あり、名古屋、京都ありで何もホテルに頼ることないでしょう。逆に悪用される可能性がありますよ」「なるほど、それもそうですね」と二人で大笑いした事があつた。箱根とか日光などはドライブする人の為のホテルならよいも知れない。と云うのはホテルのグリルとかレストラン、或はおすしやを利用出来るから。でも朝食はやはりホテルへでも行かないと頂けないと云う事になる。もつとも軽い物をもつていて私式にお茶位をのむならそれでもすむが、あちらのモテルは冷い水は備へつてあるがのんだり喰べたりは一応出来ない。お茶の葉は固くしぼつて、紙へでも包みこみ箱へ入れておけばよいから、私はモテルで異例のお茶を朝晩ののどいたわけである。或る時そのコップがピンと音をたてた。あわてたマリオンはひびの入つたコップをそつととり、新らしい小さいタイルをコップの下にひいた。熱くなったコップと冷いタイルとの間をタオルで温度を調節出

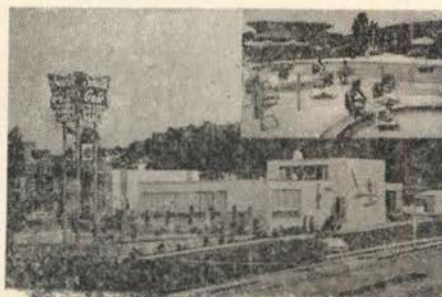
来るわけである。この事を日本に帰えつて友人に話しをしたら、あるスチュワードスの方がサンフランシスコで即せきラーメンをコップに入れて私のしたように水を入れ電気のコードでいる間、うっかりお風呂に入つてしまつた。三四分のに立つコップだからたまらない。ピンとわれバスルームにしているマットはラーメンの味がすつかり飛び散つてしまつた。そして、あやまって幾らかお金を払つたと話され、皆で笑つたことがある。

モテルのバスタブで私が感心したことは、長々と身体を伸ばして入れるあちらのバスタブは私の様な小さい者には出る時下手をするところとすべる。泊るお客が殆んど一泊で毎夜代わる故、家庭用のゴムの様な下じきを使えない。一回毎にすてられる。紙ではない紙の様なものを下へ引いてその上へ足をつける事が出事た。

朝出かける時、中年か、もう少し年をとつた婦人（白人）達が白いユニホームを着て各部屋からシーツ、タオル等をまとめてとり出し、手押車へつみ運んで行くのを見た。昼間は持主夫婦しか事務所にいない。大い部屋案

内は奥さんがしてくる。この働らきに来て
いる人達はパートタイム式に出勤するのとも
知れない。ニューイングランドで二晩目に泊
ったホテルの奥さんが夫婦二人で七年前に最
初に一棟を建て、お金が貯まると次の一棟を
増築し私達が泊った時は三番目の棟が出来上
った所であった。部屋数は二十あるとか。夫
婦二人の努力のたまものである。人に一人も
余計泊ってもらう為にニコニコして愛想がよ
い。他の事はサーヴィスしないから、職業と
しては気楽かも知れない。そこへ又働きに来
る婦人連がいるわけなのである。ホテルで黒
人の働らいているのを一度も私は見なかつ
た。遠い所、大都市が近くにない北部或は南
部の町々ではホテルが、只一つの泊る所なの
である。モーターホテル、自動車で来る人の
為のホテルがホテルと呼ばれるようになった
のだろうと考えられる。ユースホテルが日本
であちこちに利用され出したが、あちらでは
ホテルも最近とみに利用されたい。ワシ
ントンで三泊したホテルは立派であった。続
けて同じ部屋に泊っている私達の部屋は夕方
かえって来るとキッチンとそうじもしてあり、

タオルなど全部毎日替えてあった。レントラ
ンも附属してなし、ホテルへ泊っているのと
同じであった。只ホテルには部屋付きのボー
イ、メードがいらないだけである。トラックの
運転手も泊るだろうに、一度もみかけなかつ
たのは又別のホテルがあるらしい。黒人の泊
る所も全然他にあるとか。黒人の旅行者を殆
んどみかけなかったのは、やはり泊る所が自
由にない為であろうか。各地へ行っても駐車
場に並んでいる車は遙々遠い州より来た人達
のナムバーがついている。例えばフロリダで
はシア
トル、
サンフ
ランシ
スコ、
ロスア
ンジェ
ルスあ
たりよ
り来た
車をみ
たし、
タオルなど全部毎日替えてあった。レントラ
ンも附属してなし、ホテルへ泊っているのと
同じであった。只ホテルには部屋付きのボー
イ、メードがいらないだけである。トラックの
運転手も泊るだろうに、一度もみかけなかつ
たのは又別のホテルがあるらしい。黒人の泊
る所も全然他にあるとか。黒人の旅行者を殆
んどみかけなかったのは、やはり泊る所が自
由にない為であろうか。各地へ行っても駐車
場に並んでいる車は遙々遠い州より来た人達
のナムバーがついている。例えばフロリダで
はシア
トル、
サンフ
ランシ
スコ、
ロスア
ンジェ
ルスあ
たりよ
り来た
車をみ
たし、



ワシントンのモーターホテル。プール付き。

グランドキャニオンではニューヨークのナン
バーをつけていた車も見かけた。アメリカ本
土四十九州の縦横にドライブするこの白人の
人達にとり又私達にホテルはなくてはならな
いものであった。

お彼岸の施本

仏教の生活

内容 彼岸から花まつりへ・

吉川英治さんの想出・質問

帳・兄弟仲よく・実話・信の

風光など楽しい春の読みもの

一部二十円・五十部以上一部十

二円実費見本三十円切手乞申込

東京都文京区湯島三組町13

仏教書肆中山書房

電話(831) 8 4 9 4

* * *

念仏と利益



山本 空外

(広島大学教授・文庫)

一

わたくしがお念仏をいのちがけで喜ばせていただくようになったのは、大正十年の夏以来で、それからでもすでに四十年になるが、さらにその因縁をさかのぼれば遠いことである。「遠く宿縁を慶べ」という『教行信証』の句は有名であるが、わたくしは文字通りそのよろこびにしたること久しい。もとよりお念仏に利益が多いからである。お念仏がいのちがけでよろこび続けられる以上の利益が、はたしてこの世の中にあるであろうか。わたくしは長年の実感と体験とに照らし、断じて無いと思う。なぜであるか。

まず大正十年の夏山口県大島郡屋代町の西蓮寺で、今なお健在な藤本浄上人の御指導のもとに、悟れなければ自殺も辞しないというほどの決意を秘して、念仏三昧に入るや、じ

つに清浄光中の自己にめざめて、歓喜踊躍おくところを知らず、しかもその一時の感激にとどまるのでなしに、こうした清浄なる歓喜は深まりゆくのみで今日にまでいたっている。もとよりお念仏は絶えず称えられて身心をうるおされ通してある。その間、世間的利益を知らないのではない。たとえば昭和四年春から数年間の欧米留学、また帰朝後同十年春、東大より文学博士の学博士の学位をうる等。しかしこれらを念仏の清浄歓喜と比較すれば、前者のごときは後者に遠く及ばない。しかも前者の類のよろこびは一般には得難く、それに反して後者の歓喜踊躍は称名念仏ごとに誰でも味わい易いとするれば、念仏の利益の普遍性にも想到すべきであろう。念仏の利益は深いうえに広いのである。

世間の利益はいわば平面的計量的に考えられるが、念仏の

利益は立体的透明的に深まるから、念仏者は世間の利益にしても何倍も深く味わえるうえに、世間的不利益の中からさえもさらに利益を味わいとしてゆくのである。利益の見方、味わい方は、その当人の見たり味ったりできる程度によるので、たとえ百万円を手にしたところで、かえって禍いを招くひともあるし、またそれを活用できるひともあるようなものである。且つその招く禍いにも色々あるし、活用の程度も様々である。それなのに百万円を手にして、一様の利益しか考えないのは平面的計量的といわねばならない。なるほど百万円は百万円には相違なくとも、その使い方がいいかんによって禍福のいづれをも招き、その程度も社会的影響も相異なる。

二

念仏の利益の重点が死後にあるかのように思うのは、その場合の論点によるので、死後を考えれば、念仏に優る利益のないことが力説されるまでのことである。それだからといって現実の利益が軽視されるのではない。浄土三部経の基本たる『無量寿経』の巻上の四誓偈頌にも、「消除三垢冥・広済衆厄難」とあるし、また同経巻下にも、この世での一日一夜の修善がかの仏国土での百歳の為善に勝れるとなし、さらに繰り返してこの世での十日十夜の修善がかの仏国土での千歳

の為善に勝れると断ずるほど、この世での現実の一日一夜、十日十夜にいかん重点が置かれているかは疑うべくもない。ために十夜法要もこの現実の本義に立脚してのことではなければならない。かように立体的透明的に考えて、現実の一日をば百年にも勝れるように生き甲斐あらしめるのには、まず現実生活の苦悩を解消してゆかなければならない。すでに根本仏教以来、苦滅が中心問題であったゆえんである。四苦八苦する人生から人間を解放してゆく利益を目指したものが仏教にほかならず、念仏も亦その線上に立ってもっとも徹底したものなのである。

最古の仏教文献といえるアシ・カ王碑にも四聖諦に言及されており、その苦・集・滅・道にも、苦の清算こそ八正道の目指すところであることは窺えるし、その苦を分析してゆけば、もとより貧苦も病苦その他も含まれてのことと、それらを根こそぎ解決してゆく道を徹底してゆくことこそ仏教であり、念仏である。三法印にしても、漢訳『雜阿含經』第十には、一切行無常、一切法無我、涅槃寂靜の三を挙げるが、それに対応するパーリ文の『相応部經典』には前二法印のみで、第三の涅槃寂靜印は見えぬから、これは後の追加としても、古い三法印は、その無常印、無我印と並んで苦印が挙げられて、パーリ文の『小部經典』の法句經第二十章に次のこ

とく述べられている。

「一切の事象は無常なりと、般若によって観る (pannaya passati) とし、そのとき苦を厭離す (nibbindati dukkhe) これ浄にいたる道なり。

一切の表象は苦なりと、般若によって観るとき、そのとき苦を厭離す、これ浄にいたる道なり。

一切の法は無我なりと、般若によって観るとき、そのとき苦を厭離す、これ浄にいたる道なり」と。

かくして三法印ともに「苦を厭離す」というパーリ語の原文は nibbindati dukkhe となっており、その「厭離す」という動詞の nibbindati は、名詞としては涅槃と音訳されるもする nibbana であってみれば、涅槃寂靜といわれるその涅槃の悟りは、苦を厭離することに直結するものでなければならず、それが三法印ともに「般若によって観るとき」という裏づけにおいてであるのは、般若の大乗思想ともつながるものと考えられる。

三

苦を厭離することは、般若の智慧にまたなければ、これを徹底し難いが、この智慧すなわち無二智こそ阿弥陀の智慧にほかならず、主・客の「二」にまつわる諸対立を離れてゆく

無二の智慧の実践をば、社会生活のいかなる階層や分野にも徹底せしめんとする平等の慈悲の結晶として、南無阿弥陀仏の称名念仏がようやく『観無量寿経』に力説せられるにいたったのである。人間は使う言葉のようになるという心理と論理にもとづくのである、称名念仏の「念々の中に於いて、阿弥陀の智慧と慈悲とに身心の浄化されてゆく利益について同経は、

「至心に声をして絶えざらしめ、十念を具足して南無阿弥陀仏と称す。仏名を称するが故に、念々の中に於いて、八十億劫の生死の罪を除く。」

という風に説いている。

「念々の中に於いて」というのであるから、重点はもとより現実そのものにある。しかも「八十億劫の生死の罪を除く」とあるからには、これ以上の利益は考えられないほどである。一つの病気の治るのでも現世利益といわれる。しかもその病気になる本は、重病ほど遺伝的体質や気質につながるものである。われわれの身心に受けついだそうした何千分の先祖代々の迷いの罪をば、ここで「八十億劫の生死の罪」というので、これが「念々の中に於いて除」かれるとすれば、病根のみならず、一切の禍根も除かれきってゆく線が決まるのであり、そうした線において先の「消除三垢冥・広済衆厄難」

もうなすける。

その要点を主体的に打ち出して、世界宗教史上最高の帰結

を投げたのが、法然上人の『選択本願念仏集』の

表紙の写真

鎌倉大仏前・香爐浮彫菩薩像

仏像は古いがゆえに尊いのではない。国宝であるからすばらしいのではない。ひとびとと共に生き、共に訴える息吹きが感ぜられ、迷える凡夫に拜まれていてこそ尊いのである。そこでは、み仏と凡夫とが一つになりける世界が開けているからである。

鎌倉の大仏を拜むたびに感ずることではあるが、み仏をより美しく、よりおごそかにただよいを示してくれるものは、境内のかもしれないが、み仏は拜まれる雲雨にあって最高の芸術味をも發揮することになる。この大仏のまんなかに、ひっそりとたたずんでいる香爐一基がある。緑青で覆われた扉に浮彫りされている像は、さながら大仏の兩脇侍のように、蓮台を持った姿と合掌をしていてある。この浮彫りに従えば、鎌倉の大仏さまは来迎の阿弥陀さまということに

なる。化仏、宝瓶はさだかでないが蓮華座

上にあるからは、一応観音・勢至などの菩薩像と見るべきであろう。しかし、この香爐は最近の作であって決して古いものではないが、東大寺の燈籠の音声菩薩や鞍馬寺の鉄燈籠の金剛力士に比べて少しの遜色も示していない。しかも、あくまでも、大仏さまの引き立て役をになって、悩めるひとびとの声を、ともに悲しみながら聞いているかのようなのである。

鎌倉長谷のさるかたに宿りて

かぜのむたほとけのひざに

うちなびき

なげくがごときむらまつのこゑ

会津八一

このような菩薩像のごとく社会の片すみで、ひとびとに明るい燈火をともし、いなければならぬ存在のひとつとして生きて行くことこそ、仏の道を求める者の姿である。

(石上善応)

ずることを得、仏の本願に依るが故なり」

と断じて、「速」と「必」とを二大支柱とす結文であるように思われる。「速」でなければ、明日を待たないのちの持主には間に合わない。また「必」でなければ、万人の悟れる平等程が成り立たない。こうした万人の速かに悟れる平等の念仏の利益をば、念々の中に於いて味わいよるこばせていただくこと、四十余年であって、その間一度もそうでない念仏をわたくしは経験したことがない。

●お知らせ

特集などにより、原稿の一部、乃至全部を、カットさせていただきましたことを、著者及び読者諸氏にお知らせすると共に、お詫び申し上げます。

▶ 仏教保育テスト ◀ め ぐ み

指導 大正大学教授 文博 竹 中 信 常
画 井上 与 志 夫 / 荻 原 弘 志 / 野 沢 知 且

B5版・48ページ 定価 100円・〒40円

目 次

おやくそく	仏教保育の主旨にのっとった希望の
はなまつり	決定版／美しいさしえにはじまり／
こいのぼり	数十葉の写真／やさしいテストをま
おぼん	とめて構成／学びながらこどもの心
おひがん	に優しさと夢をそだてる／画企的な
ねはんえ	保育指導書／園児の教材に／はなま
じょうどうえ	つり・運動会の記念に／寺院の応接
ひなまつり	室にもそなえて／法事のひと時同伴
みおしえ	の幼児にソット見せてあげて下さい
保育テスト	

割引 三〇冊以上九〇円五〇冊以上
八五円／三〇冊以上よりは送料不要
三月中お申込みの方には三〇冊のご注
文よりはなまつりカード同数サービス

発 行 所 東京都千代田区
飯田町1の21

大 道 社

TEL <332>5944
振替 東京 8247

「浄土」購読規定	
一部 定価 金五十円 (送料 六円)	会費一カ年 金六〇〇円 (送料 不要)
昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 昭和三十八年二月廿五日 印刷 昭和三十八年三月一日 発行	浄土 三月号
編集兼 佐藤 密雄 発行人 関 二三男 印刷所 新光社印刷株式 会社	定価 五十円
東京千代田区飯田町一ノ廿一 電話東京三三二局五九四四番 振替東京八二二八七番	発行所 法然上人饗仰会

大正大学

学長 青木道晃 東京都豊島区西巢鴨四丁目

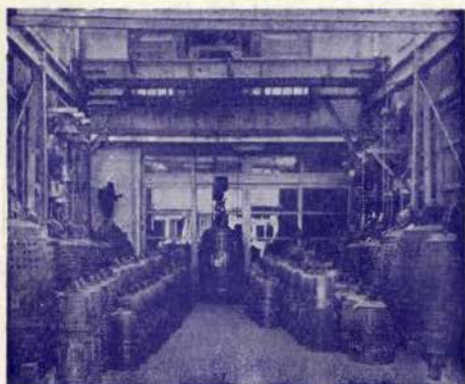
- 特色
1. 西と東、右と左の中道を行く仏教精神が本学建学の基礎である。従って、穏健中正、操守高き学生を育成する事を目標とし、教授凡てが身を以て指導している。
 2. 学生は、入学と同時に専攻別による13の研究室に所属して夫々の教授から指導を受けるほか、研究室の豊富な蔵書を利用して勉強できる。

専攻

文学部＝国文学、英文学、史学、西洋哲学、宗教学
中国学、社会学、社会事業の8専攻
仏教学部＝仏教学、梵文学、天台学、真言学、浄土学の5専攻
大学院＝修士コース、博士コース（仏教学、宗教学、国文学）

昭和38年度1年の募集人員は200名、試験科目は、国語（漢文をふくむ）社会、外国語（英、独、仏のうち一つ）

試験期日 第1次 2月27日・28日（水・木） 詳細は入学案内
第2次 3月27日・28日（水・木） を参照のこと



鋳物師 老子次右衛門

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分（梅田新道大映横東へ一丁右側）

梵鐘 (45cm～85cm)
在 庫 豊 富
喚 鐘 (12cm～51cm)
音 響 理 学 博 士 青 木 一 郎 先 生
梵鐘界の権威 日展 芸術院賞受賞 参事 香取正彦先生

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 040 8847番 本社工場 高岡市横田